

## 副論文 2

特別養護老人ホームで作業療法士が介護職と  
情報共有するための自記式チェックリストの開発

Development of a self-assessment checklist for occupational therapists  
to share information with nursing care workers at a special nursing  
home for the elderly

宇佐美好洋<sup>1), 2)</sup>・小林隆司<sup>3)</sup>

- 1) 帝京平成大学 健康メデイカル学部 作業療法学科
- 2) 首都大学東京大学院 人間健康科学研究科 作業療法科学域  
博士後期課程
- 3) 首都大学東京大学院 人間健康科学研究科 作業療法科学域

2018 年 12 月発行

作業療法 37 巻 6 号 pp627-636

2017 年 8 月 25 日受付, 2018 年 4 月 24 日受理

## 要旨

特別養護老人ホーム（以下，特養）で作業療法士（以下，OT）が介護職（以下，CW）との情報共有を促進する要因にどの程度関わっているかを評価する自記式チェックリストを開発した．方法は，質問紙調査を用いた．全国の特養に勤務する OT に調査票を配布し，チェックリストの 19 項目について項目反応理論に基づき分析を行った．その結果，223 名から回答が得られ，すべての項目が尺度構成に適切であることが示された．また，チェックリストの測定精度は，情報共有を促進する能力が中程度までの能力を有した OT に実施した場合に保たれており，能力の高い OT に実施した場合には低くなることが確認された．

Key Words：介護老人福祉施設，作業療法，連携

## はじめに

特別養護老人ホーム（以下、特養）における作業療法士（以下、OT）の役割は、「入居者への直接的なサービス」と、「介護職（以下、CW）との連携」をすることによって入居者が「参加」や「活動」の状態を高められる生活習慣が作れるよう支援することである<sup>1)</sup>。この役割の中で、特に重要なことはCWとの連携であると考えられる。なぜなら、特養に勤務するOT数は、特養施設数7,000強に対して654名<sup>2)</sup>ときわめて少なく、OTだけではすべての入居者に直接的なサービスを提供することができないからである。そのため、OTは入居者の状態を適切に評価し、評価した結果を日々の介護を担当しているCWに伝え、支援していくことが重要といわれている<sup>3)</sup>。しかし、特養におけるCWの労働密度は非常に高度で、ある意味限界状況であることが報告されている<sup>4)</sup>。さらに、特養でOTの役割は認識されていない状態であり<sup>1)</sup>、1人職場である可能性も高いため、CWとの連携状況は自分で確認しなければならないことが推察される。したがってCWとの連携は重要なことであるが、容易ではないと考えられる。

大塚ら<sup>5)</sup>は、専門職連携の構成要素として「情報の共有化」、「チームケアの促進」、「サービス提供の円滑化」の3つを抽出しており、中でも「情報の共有化」が最も中心となる要素であるとしている。しかし、医療・福祉専門職間では情報提供者と被提供者の認識に相違があることが報告されており、職種ごとに必要な情報の内容、および情報の提供方法を明らかにする必要性が指摘されている<sup>6)</sup>。

筆者らは過去の研究で、特養におけるOTのCWとの情報の共有化の促進要因を明らかにした<sup>7)</sup>。この促進要因は、「情報を共有する動機がある」、「情報を共有するために普段から心がけていること」、「情報を共有するための戦略をたてる」、「情報を共有するための戦略的な働きかけをする」、「情報の共有化の取り組みの成果がある」、「外からの働きかけ」の6つであった。OTがこの促進要因にそった

実践を可能にするためには、促進要因にどの程度関わっているかを自分自身で評価できるツールが必要であると考えられる。

以上のことから、本研究の目的は、特養で OT が CW と情報共有する際、情報共有を促進する要因にどの程度関わっているかを評価する指標として、尺度となる自記式チェックリスト（以下、チェックリスト）を開発することとした。しかし、OT は特養に勤める者が少ないうえに、年齢や経験年数など属性の分布も不明である。こうした状況では、従来の古典的テスト理論に基づき尺度開発を行うと、標本依存性や項目依存性の問題を生じる可能性がある。そこで、本研究では項目反応理論（Item Response Theory:以下、IRT）を用いてチェックリストの測定精度を検討することとした。IRT には、テストに含まれる項目の難易度とそのテスト受験者の能力を分離して表現できるという特徴があるため<sup>8)</sup>、本研究においても標本依存性や項目依存性の問題を解決できると考えられる。

本研究の成果によりチェックリストを開発することができれば、OT が使用することで OT と CW 間の情報共有が円滑になされ、入居者の QOL 向上に資するだけでなく、CW の支援力の向上にも寄与することが考えられる。

## 用語の操作的定義

本研究では「情報の共有化」を、二人以上の異なった専門職が、特養入居者の「参加」や「活動」の状態を高められる生活習慣を作することを目的に連携・協働する際、必要となる情報を共有することと定義した。

## 方法

### 1. 対象

対象者は、日本作業療法士協会の会員であり、特養で常勤、非常

勤に関わらず勤務している者とした．なお，現在 OT として勤務していない者は除外した．設定した参入条件に該当する者の抽出を日本作業療法士協会に依頼した所，401 名が対象となった（平成 29 年 5 月 8 日現在）．

## 2. 倫理的配慮

本研究は，首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会（承認番号:17002），と帝京平成大学倫理委員会（承認番号:28-099）の承認を得たうえで進めた．

## 3. 調査内容

調査票は，選択回答方式，自由回答方式により以下の内容で作成した．また，言語的妥当性を確認するために，原案を大学院のゼミのメンバー（教員 5 名，博士後期課程 2 名，修士前期課程 4 名）に 2 回，日本作業療法士協会の会員でない特養に勤務している OT1 名に 1 回実施した．そして，質問項目に「情報」または「情報共有」という言葉を含めるなど，対象者が質問の意味を読んでわかるように，質問項目を加筆修正した．

なお，本研究の目的であるチェックリストは，後述する「2）CW との『情報の共有化』の促進要因に関する認識」19 項目から構成した．

### 1) 対象者の基本属性

対象者の基本属性は，性別，年齢，OT としての経験年数，特養での勤務年数，現在働いている特養での勤務年数，勤務形態，勤務日数，役職，一緒に働いている OT の人数とした．

### 2) CW との「情報の共有化」の促進要因に関する認識

筆者らの先行研究において明らかにした OT の考えている CW との「情報の共有化の促進要因」に関する認識のサブカテゴリーには，CW との「情報の共有化」の促進要因として OT が考えている内容が 19 項目ある<sup>7)</sup>．この 19 項目を採用して質問文を作成した．

調査票の回答方法として、全項目で①ほとんど当てはまらない、②あまり当てはまらない、③やや当てはまる、④よく当てはまる、の4件法を用いた。

### 3) 「情報の共有化」の実施状況に関する認識

「情報の共有化」の実施状況に関する認識（以下、実施状況に関する認識）としてCWと情報共有できているかを尋ねた。調査票の回答方法として、①ほとんど当てはまらない、②あまり当てはまらない、③やや当てはまる、④よく当てはまる、の4件法を用いた。

## 4. データの収集方法

本研究は、質問紙調査とした。調査を開始するにあたり、対象者全員に予告状を郵送した。その1週間後に筆者らが作成した自己記入式の質問紙調査票と、本研究に関する依頼文書、および返信用封筒を郵送し、約2週間後に礼状兼催促状を郵送した。さらに3週間後にもう一度、礼状兼催促状を郵送した。質問紙調査票は無記名とし、回収期間は2017年5月29日から7月14日とした。そして、質問紙調査票の返信をもって同意が得られたものとした。

## 5. データの分析方法

### 1) 対象者の特徴

返信のあった質問紙調査票の対象者の基本属性、実施状況に関する認識について記述統計を行い、度数、百分率、平均値、標準偏差、中央値を算出した。

### 2) 実施状況に関する認識と対象者の基本属性の関係

実施状況に関する認識と対象者の基本属性の関係については、ポリシリアル相関係数を算出した。また、基本属性の「年齢」、「OTとしての経験年数」、「特養での勤務年数」、「現在働いている特養での勤務年数」と実施状況に関する認識については、正規性を確認し、正規性があればt検定（パラメトリック検定）、なければ

Mann-Whitney の U 検定（ノンパラメトリック検定）をあわせて実施した．なお，実施状況に関する認識の 4 件法の回答は，①ほとんど当てはまらない，②あまり当てはまらないの選択肢を「できていない」，③やや当てはまる，④よく当てはまるの選択肢を「できている」の 2 群に分けて分析した．

### 3) チェックリスト項目の分析

チェックリストは，情報共有を促進する要因にどの程度関わっているかを評価する尺度になるよう，上記で作成した調査票のチェックリスト 19 項目の回答をほとんど当てはまらない（1 点）からよく当てはまる（4 点）とした．

#### (1) 妥当性の検討と一次元性の確認

IRT では，尺度項目の一次元性が前提となる．本研究では，尺度の一次元性の確認をポリシリアル相関とカテゴリカル因子分析（推定法は重み付き最小二乗法）で行った．

まず，測定する対象と各項目との関連性を保証するために，項目の妥当性を統計的に確認する必要がある．そこで，チェックリスト各項目の得点（以下，項目得点）とチェックリスト各項目の合計得点との相関係数の検討を行った．本研究では，項目得点を順序尺度，チェックリスト各項目の合計得点を間隔尺度として扱うため，ポリシリアル相関係数を用いることとした．また，全項目のポリシリアル相関係数が 0.2 以上で妥当性のある項目と判断した<sup>9)</sup>．ポリシリアル相関係数による検討で項目を取捨選択したあと，残った項目でカテゴリカル因子分析を行い尺度の一次元性を確認した．カテゴリカル因子分析では，ポリコリック相関係数を用いて 1 因子解による因子分析を行った．因子分析により，固有値のスクリープロットと因子寄与率を確認した．本研究では，第 1 因子の因子寄与率が 20% 以上で尺度の一次元性があると判断した<sup>9)</sup>．

#### (2) チェックリストの項目得点の平均値と標準偏差

一次元性の確認後に記述統計を行い，項目得点の平均値と標準偏差を求めた．

### (3) 内的整合性の検討

内的整合性の検討は、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。Cronbach の  $\alpha$  係数は 0.7 以上を基準値とした。

### (4) IRT による測定精度の検討

IRT による分析は、尺度の一次元性を確認したうえで、段階反応モデルの 2-Parameter Logistic model を適用し、項目母数（識別力、困難度）を推定した。

そして、チェックリスト各項目の合計得点のテスト反応関数（Test Response Function；以下、TRF）とテスト情報関数（Test Information Function；以下、TIF）を描いた。基準値は、識別力は 0.2～2.0、困難度は絶対値 4.0 以内とした<sup>9)</sup>。

### 4) チェックリスト各項目の合計得点と実施状況に関する認識の関係

チェックリスト各項目の合計得点と実施状況に関する認識の関係は、チェックリスト各項目の合計得点を間隔尺度、実施状況に関する認識の項目得点を順序尺度として扱うため、ポリシリアル相関係数を用いて相関分析を行った。また、記述統計を行い、チェックリスト各項目の合計得点の平均値、標準偏差を算出した。

統計ソフトは、記述統計、Cronbach の  $\alpha$  係数の算出、Shapiro-Wilk 検定、Mann-Whitney の U 検定で SPSS statistics Ver.24 を用いた。ポリシリアル相関とカテゴリカル因子分析は HAD16.01<sup>10)</sup>、IRT は Exametrika Ver.5.3 を用いた。統計学的有意水準は 5%未満に設定した。欠損値の処理は、記述統計、Cronbach の  $\alpha$  係数の算出、Shapiro-Wilk 検定、Mann-Whitney の U 検定を検定ごとに除外、相関分析をペアワイズ削除、因子分析をリストワイズ削除に設定した。IRT は、欠損値を無視した<sup>11)</sup>。

## 結果

### 1. 調査票の回収結果と対象者の特徴



調査対象者は、日本作業療法士協会より抽出された 401 名（特養勤務者全数）のうち、調査票が回収された 298 名（回収率 74.3%）であった。このうち、退職、休職、特養に勤めていないなどの 75 名を除いた 223 名を有効回答者（有効回答率 55.6%）とし、分析の対象とした。

質問紙調査票の対象者の基本属性について、記述統計の結果を表 1 に示す。男女の内訳は、男性 74 名、女性 149 名であった。各平均値と標準偏差については、年齢  $37.51 \pm 7.46$  歳、OT としての経験年数  $12.83 \pm 7.18$  年、特養での経験年数  $5.68 \pm 4.96$  年、現在働いている特養の勤務年数  $5.35 \pm 4.67$  年であった。一緒に働いている OT の人数は、 $0.69 \pm 1.11$  人であった。実施状況に関する認識は「できている」が 166 名、「できていない」が 57 名であった。

## 2. 実施状況に関する認識と対象者の基本属性の関係

実施状況に関する認識と基本属性のポリシリアル相関係数は、「特養での勤務年数」で 0.245, 「現在働いている特養での勤務年数」で 0.285 と弱い相関があった。それ以外の項目では相関は認められなかった。また、基本属性の「年齢」, 「OT としての経験年数」, 「特養での勤務年数」, 「現在働いている特養での勤務年数」と実施状況に関する認識については、正規性がなく、Mann-Whitney の U 検定を実施した。その結果, 「年齢」( $p=0.004$ ), 「OT としての経験年数」( $p=0.021$ ), 「特養での勤務年数」( $p=0.000$ ), 「現在働いている特養での勤務年数」( $p=0.000$ ) と 4 項目で有意な差があった（表 1）。

## 3. チェックリスト項目の分析

### 1) 妥当性の検討と一次元性の確認

項目得点とチェックリスト各項目の合計得点のポリシリアル相関係数を表 2 に示す。ポリシリアル相関係数は、いずれも 0.2 以上であった。また、カテゴリカル因子分析による固有値のスクリープロットを図 1 に示す。因子寄与率は、43.6%であった。

## 2) チェックリスト各項目得点の平均値と標準偏差

項目得点の平均点と標準偏差を表 2 に示す．平均値は，項目 1 が 3.75 と最も高く，項目 19 が 2.79 と最も低い値を示していた．

## 3) 内的整合性の検討

Cronbach の  $\alpha$  係数は，0.86 であった．

## 4) IRT による測定精度の検討

IRT の結果は，項目母数の推定値を表 3，TRF を図 2 左，TIF を図 2 右に示す．TRF $\theta$  が 0 のときに 60.4 点であった．識別力 (a) の平均値は 0.980，範囲は項目 14 の 0.599 から項目 9 の 1.197 であった．

識別力 (a) の平均値は 0.980，範囲は項目 14 の 0.599 から項目 9 の 1.197 であった．すべての識別力の値が 0.5 以上であり，高すぎる推定値がでていることもなく，基準値を満たしていた．識別力 (a) は，項目 14 が最も低かった．困難度 (b1, b2, b3) は，平均値が b1 で -2.603，b2 で -1.577，b3 で -0.248 であった．b1 の範囲は項目 6 の -2.987 から項目 19 の -2.108，b2 の範囲は項目 11 の -2.626 から項目 19 の -0.531，b3 の範囲は項目 1 の -0.786 から項目 19 の 1.621 であった．すべての困難度が絶対値 4.0 以内であり，基準値の範囲内であった．困難度は，項目 19 が最も大きかった．

TIF では， $\theta = -1.6$  から  $-1.2$  まだが上限の 5.6 を示していた．

## 4. チェックリスト各項目の合計得点と実施状況に関する認識の関係

チェックリスト各項目の合計得点と実施状況に関する認識の項目得点のポリシリアル相関係数は，0.536 であった．チェックリスト各項目の合計得点の平均値 $\pm$ 標準偏差は，全体が 63.65 $\pm$ 7.24 点であった．情報共有できている認識を有する OT は 65.34 $\pm$ 6.19 点，できていない認識を有する OT は 58.74 $\pm$ 7.87 点であった．

## 考察

## 1. 実施状況に関する認識について

実施状況に関する認識と対象者の基本属性の相関係数は、「特養での勤務年数」と、「現在働いている特養での勤務年数」で弱い相関があった。それ以外の項目では相関は認められなかった。この2つの変数で相関の強い「現在働いている特養での勤務年数」の中央値をみると、情報共有できていないOTで2年、情報共有できているOTで5年であり、情報共有できていないOTの方が勤務年数の値が低いことが確認できた。

実施状況に関する認識が「特養での勤務年数」、「現在働いている特養での勤務年数」と相関が認められ、他の項目で認められなかったのは、特養という施設の特徴が影響していると考えられる。特養は、OTの配置が義務付けられておらず、実際に勤務しているOTも少なく、OTの役割も認識されていない状態であり<sup>1)</sup>、特養にとってOTは希少な職種であることが推察される。実際に、特養でOTとCWとの情報の共有化を促進するには、「CWと関係作りをする」、「考えるプロセスを共有する」、「長い目で見て、よい結果を繰り返し伝える」など、現在働いている特養での経験が求められる内容が必要だとされている<sup>7)</sup>。以上のことから、「特養での勤務年数」、「現在働いている特養での勤務年数」以外の要因は、実施状況に関する認識に関連がなく、情報共有には、「特養での勤務年数」、特に「現在働いている特養での勤務年数」が重要なことが示唆される。

## 2. チェックリスト項目の分析について

### 1) 妥当性の検討と一次元性の確認

項目得点とチェックリスト各項目の合計得点のポリシリアル相関係数をみると、いずれも0.2以上を示した。そのためチェックリストは測定したい対象と関連性のある項目で構成されていると考えられる。したがって、19項目すべてはチェックリスト各項目の合計得点の「情報の共有化の促進要因」という特性を測定するものと仮定できる。また、カテゴリカル因子分析による固有値のスクリープロ

ット（図 1）をみても、第 1 因子から第 2 因子にかけて特に大きく減少し、以降は比較的なだらかな減少となっている。そして、因子寄与率も 43.6%であり、20%以上であることから尺度の一次元性が成り立っていると考えられる。

## 2) 内的整合性の検討と測定精度の検討

Cronbach の  $\alpha$  係数は 0.86 であり、内的整合性のある尺度であると考えられる。

項目得点の平均値は、項目 1, 2, 3, 5, 7, 11, 13, 14, 15, 16 が、「平均値＋標準偏差」の取り得る値（1 以上 4 以下）を超えており、天井効果が認められる。しかし、項目母数をみると、基準値を満たしていないものはなかった。したがって、すべての項目が尺度構成に相応しい適切なものであることが考えられる。

識別力の値は、0.01 から 0.34 が「非常に低い」、0.35 から 0.64 が「低い」、0.65 から 1.34 が「中程度」、1.35 から 1.69 が「高い」、1.70 以上が「非常に高い」を表す<sup>12)</sup>。この基準に当てはめて考えると、項目 14 のみ識別力が低く、それ以外の項目はすべて中等度の識別力を示すことが考えられる。

項目 14 の識別力が低いということは、項目 14 が評価に対する影響の少ない項目であることを示している。さらに、b2 の値が小さかったことから、他の項目に比べ「やや当てはまる」、「よく当てはまる」の回答が出やすい項目であると考えられる。それゆえ、項目 14 は情報共有を促進する能力の高い OT だけでなく、低い OT でも「やや当てはまる」、「よく当てはまる」と回答する確率が高い項目であることが考えられる。特養の終末期ケアでは、チームプロセス（情報共有を含む）とリーダーの存在に関連が認められており、リーダーを明確にし、リーダーがその役割を果たす方が、よりよい終末期ケアの実施に近道となることが提言されている<sup>13)</sup>。したがって、項目 14 は能力の高い、低いに関わらず、当たり前のように認識している項目であったため、識別力が低くなったと考えられる。

困難度をみると、b2 がすべて 0 以下であり、-2 を超える項目も

あった．3つの困難度の中央である b2 が，潜在特性の 0 から -2 の間にあるということは，反応全体が潜在特性の軸上で，左側（値の小さい方）にずれていることを示している．つまり，全体的に「やや当てはまる」，「よく当てはまる」の回答が出やすい傾向にあったことが考えられる．これは，チェックリストの項目を OT の考えている CW との「情報の共有化の促進要因」に関する認識で構成したものと，アンケートの回答者に情報共有できている OT が多かったことが影響していると考えられる．実際に，チェックリスト各項目の合計得点と実施状況に関する認識のポリシリアル相関係数は，中等度の正の相関が認められ，実施状況に関する認識は「できている」が 166 名，「できていない」が 57 名と「できている」が多かった．

全体的に「やや当てはまる」，「よく当てはまる」の回答が出やすい傾向の中，項目 19 の困難度は，b1 が -2.108，b2 が -0.531，b3 が 1.621 で一番大きかった．つまり，他の項目と比べ「やや当てはまる」，「よく当てはまる」の回答が出にくく，「ほとんど当てはまらない」，「あまり当てはまらない」の回答が出やすい項目であったと考えられる．

項目 19 の困難度が最も大きかったことについては，CW の業務量の多さが影響していると予想される．特養の介護は，基本的生理的介護中心に設定され，しかもそれらをこなすだけで精一杯の人手しか配置されておらず，CW の労働密度は非常に高度で，ある意味限界状況であることが報告されている<sup>4)</sup>．このような状況では，CW が協力的になることは容易でないことが考えられる．したがって，項目 19 は，他の項目と比べ「やや当てはまる」，「よく当てはまる」の回答が出にくく，「ほとんど当てはまらない」，「あまり当てはまらない」の回答が出やすかったという結果になったものと推察される．

TRF（図 2 左）をみると，推定能力値と合計得点の間（ $\theta$  が -2.0 付近から 1.2 付近の範囲）には非常に強い直線的関係が認められ，グラフの傾きが急であった．これにより，合計得点が 41.9 点前後から 68.5 点前後の範囲にある時に，測定精度がよいことが考えられる．

次に、TIF（図 2 右）をみると、 $\theta$  が -3.2 で情報量が 4.0 付近、 $\theta$  が 3.2 で情報量が 1.0 程度であった。そして、 $\theta$  が -1.6 から -1.2 で情報量が最大（5.6）となっていた。以上のことから、チェックリストの測定精度は、情報共有を促進する能力が中程度までの能力を有した OT に実施した場合に保たれており、能力の高い OT に実施した場合には低くなることが考えられる。

情報共有を促進する能力が高い OT に実施した場合に測定精度が低くなるのは、困難度で b2 が潜在特性の 0 から -2 の間にあった理由と同様である。すなわち、チェックリストの内容と実施状況に関する認識の影響が考えられる。チェックリストの項目は、CW との「情報の共有化」の促進要因として OT が考えている内容で構成されており、実施状況に関する認識は「できている」と回答した者が 166 名と大半を占めていた。それゆえに、「やや当てはまる」、「よく当てはまる」の回答が出やすい傾向となり、情報共有を促進する能力が高い OT に実施した場合の測定精度が低くなったと考えられる。

### 3. チェックリスト各項目の合計得点と実施状況に関する認識の関係

ポリシリアル相関係数は、中等度の正の相関が認められた。つまり、チェックリスト各項目の合計得点と実施状況に関する認識の関係は、チェックリスト各項目の合計得点が高いと実施状況に関する認識は低くなり、チェックリスト各項目の合計得点が高いと実施状況に関する認識も高くなる関係にあることが考えられる。

しかし、中等度の正の相関ということは、チェックリスト各項目の合計点が高くても、実施状況に関する認識が低い OT がいるということである。これは、あくまで今回の調査が OT の主観的な認識を調査しているため、実際の実施状況を客観的に評価したものではないことが影響していると予想される。例えば、実際には情報共有できているが、OT 自身は、情報共有できているのか自分の実践に自信を持ってない場合などがある。1 人職場である OT には、同じように

働いている OT と情報交換する機会は少なく、自分自身の実践を振り返る機会が少ないことが考えられる。こういった意味でも本研究で開発したチェックリストは、自分の実践を振り返る際に、一助になることが期待される。

#### 4. チェックリストの臨床での活用方法

測定精度の検討から、チェックリストは中等度までの能力を有した OT に対する測定精度が高いという特徴があることが考えられる。したがって、特養に勤める OT の中でも、情報共有を促進する能力が中等度までの者が使用することで、自分の状態を正確に把握できるといえる。さらに、能力が低い場合にはどの程度関わっているか数字で確認できるとともに、どの「情報の共有化の促進要因」に関わっていないのかも把握することができると考えられる。

以上のことから、チェックリストは特養に異動したばかりの OT や経験の浅い OT が自分自身で「情報の共有化の促進要因」にどの程度関わっているか簡単に確認するために有用であり、使用することで OT と CW 間での情報共有を円滑にし、入居者の「参加」や「活動」の状態を高められる生活習慣の構築や CW の支援力の向上に寄与することが考えられる。

#### 5. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、チェックリストの項目に、OT が考えている CW との「情報の共有化」の促進要因を採用したが、すべての促進要因を網羅できていない。今後は、他の促進要因についても明らかにし、チェックリストの項目を検討していく必要がある。

また、チェックリストの選択肢を 4 件法としたため、能力の高い OT の情報量が低くなったことも今後の検討課題であると考えられる。今後は、選択肢数を増やし、能力の高い OT にも対応できるようなチェックリストに改良することも検討していく。

## 謝 辞

本研究を実施するにあたり，調査に協力していただいた特養に勤める OT の方々に心から感謝申し上げます．



表1 対象者の特徴

属性		全体		情報共有できている		情報共有できていない		
		人数	%	人数	%	人数	%	
全体		223	100.0	166	74.4	57	25.6	
性別	男性	74	33.2	51	30.7	23	40.4	
	女性	149	66.8	115	69.3	34	59.6	
勤務形態	常勤	208	93.3	155	93.4	53	93.0	
	非常勤	13	5.8	10	6.0	3	5.3	
	その他	2	.9	1	.6	1	1.8	
勤務日数	週5日以上	209	93.7	155	93.4	54	94.7	
	週4日	2	.9	1	.6	1	1.8	
	週3日	1	.4	1	.6	0	.0	
	週2日	2	.9	2	1.2	0	.0	
	週1日	2	.9	2	1.2	0	.0	
	月数日	2	.9	1	.6	1	1.8	
	その他	4	1.8	4	2.4	0	.0	
	未記入	1	.4	0	.0	1	1.8	
役職	あり	73	32.7	59	35.5	14	24.6	
	なし	150	67.3	107	64.5	43	75.4	
		平均値±標準偏差	中央値	平均値±標準偏差	中央値	平均値±標準偏差	中央値	p値
年齢（歳）		37.51±7.46	37.00	38.31±7.33	38.00	35.14±7.41	34.00	.004
OTとしての経験年数（年）		12.83±7.18	11.00	13.45±7.36	12.00	11.00±6.35	9.00	.021
特養での勤務年数（年）		5.68±4.96	4.00	6.37±5.18	5.00	3.64±3.58	2.00	.000
現在働いている特養での勤務年数（年）		5.35±4.67	4.00	6.02±4.80	5.00	3.36±3.61	2.00	.000
一緒に働いているOTの人数（名）		.69±1.11	.00	.70±1.14	.00	.65±1.01	.00	ns

ns : not significant (Mann-WhitneyのU検定)

表2 項目得点の平均値・標準偏差とチェックリスト各項目の合計得点との相関係数

項目 番号	質問項目	平均値	標準偏差	ポリシリアル相関係数
1	入居者の生活を豊かにするために情報共有を行う	3.75	.49	.683
2	介護職のレベルアップを図るために情報共有を行う	3.31	.72	.688
3	リスク管理のために情報共有を行う	3.68	.53	.715
4	情報を共有するために1つ1つの事例を大切にす	3.30	.69	.711
5	常に情報を共有するよう意識する	3.51	.62	.711
6	短い時間で的確に情報を共有できるようにする	3.24	.71	.597
7	情報を共有するために介護職との関係作りをする	3.61	.56	.724
8	情報を共有するために介護職と考えるプロセスを共有する	3.06	.78	.689
9	情報を伝えた後のフォローアップをする	3.22	.69	.802
10	情報共有するためには、長い目でみて、いい結果を繰り返し伝える	3.12	.73	.637
11	情報は、わかりやすく伝える	3.68	.49	.701
12	情報は、興味を持ってもらえるように伝える	3.29	.70	.640
13	情報は、介護業務の中でできるようにして伝える	3.50	.61	.581
14	キーポイントとなる人と情報を共有する	3.63	.55	.460
15	情報を共有するためのシステム（カルテ、連絡ノート、カンファレンス、申し送りなど）を利用する	3.65	.57	.505
16	介護職同士で情報を共有してもらう	3.41	.74	.672
17	情報共有を何度も繰り返していくうちに介護職の信頼を得た	3.17	.68	.710
18	伝えた情報が日常生活で反映された	3.04	.62	.538
19	情報共有することに介護職が熱心で協力的である	2.79	.76	.554

ポリシリアル相関係数のp値は、すべての項目で $p < .01$ であった

表3 チェックリストの項目反応理論

項目	質問項目	a	b1	b2	b3
1	入居者の生活を豊かにするために情報共有を行う	.852	-2.706	-2.274	-.786
2	介護職のレベルアップを図るために情報共有を行う	1.105	-2.479	-1.295	.335
3	リスク管理のために情報共有を行う	.947	-2.738	-2.190	-.507
4	情報を共有するために1つ1つの事例を大切にす	1.092	-2.551	-1.347	.418
5	常に情報を共有するよう意識する	1.008	-2.739	-1.743	-.073
6	短い時間で的確に情報を共有できるようにする	.977	-2.987	-1.223	.527
7	情報を共有するために介護職との関係作りをする	1.005	-	-2.012	-.310
8	情報を共有するために介護職と考えるプロセスを共有する	1.173	-2.405	-.785	.787
9	情報を伝えた後のフォローアップをする	1.197	-2.503	-1.169	.611
10	情報共有するためには、長い目でみて、いい結果を繰り返し伝える	1.075	-2.253	-1.149	.882
11	情報は、わかりやすく伝える	.937	-	-2.626	-.471
12	情報は、興味を持ってもらえるように伝える	.999	-2.869	-1.283	.405
13	情報は、介護業務の中でできるようにして伝える	.881	-	-1.938	-.052
14	キーポイントとなる人と情報を共有する	.599	-2.859	-2.360	-.381
15	情報を共有するためのシステム（カルテ、連絡ノート、カンファレンス、申し送りなど）を利用する	.681	-2.875	-2.094	-.525
16	介護職同士で情報を共有してもらう	1.082	-2.259	-1.418	.075
17	情報共有を何度も繰り返していくうちに介護職の信頼を得た	1.152	-2.493	-1.244	.785
18	伝えた情報が日常生活で反映された	.857	-2.825	-1.292	1.367
19	情報共有することに介護職が熱心で協力的である	1.001	-2.108	-.531	1.621
平均値		.980	-2.603	-1.577	.248

識別力:a, 困難度:b1, b2, b3

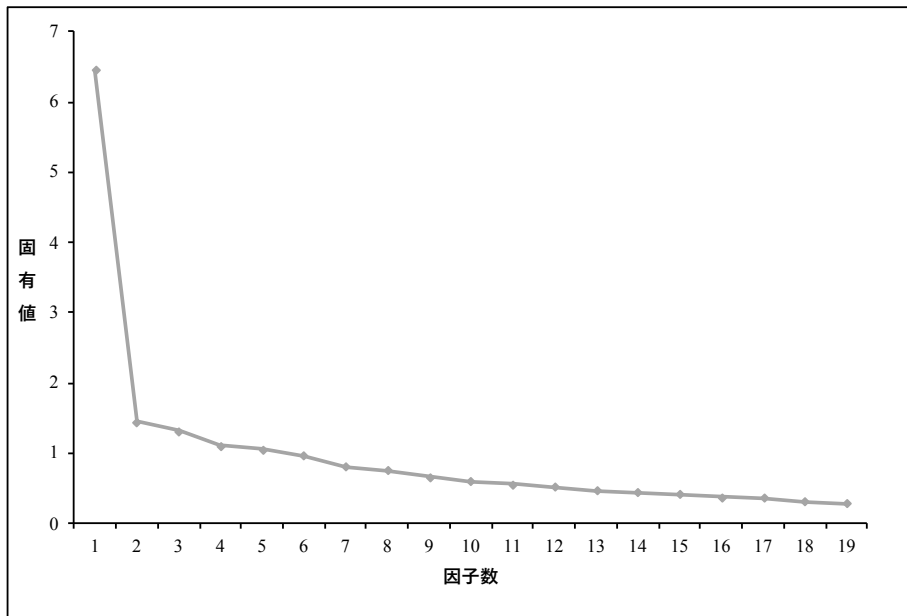


図 1 ポリコリック相関係数による 固有値のスクリープロット

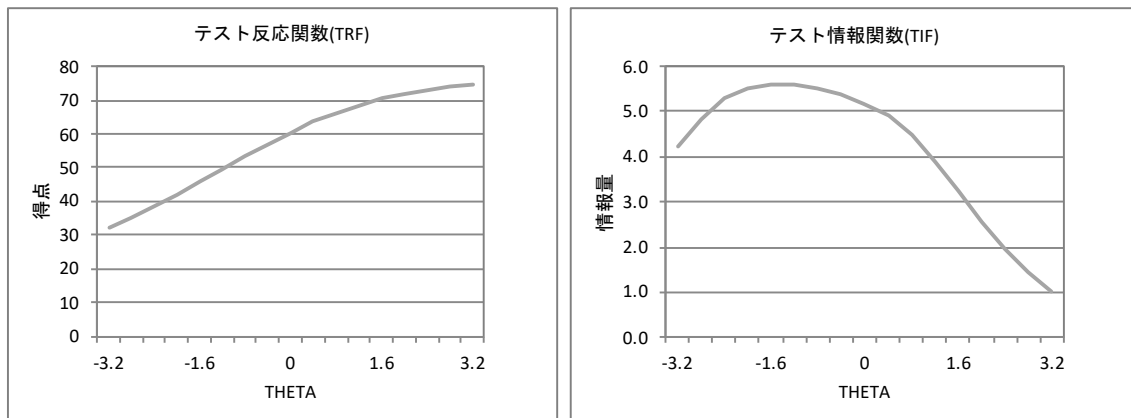


図2 チェックリストの項目分析 (左:TRF, 右:TIF)

## 文献

- 1) 宇佐美好洋，小川恵子，西田裕介：我が国の特別養護老人ホームにおける作業療法の現状と課題．リハビリテーション科学ジャーナル 6：47-56，2010.
- 2) 日本作業療法士協会：2015 年度日本作業療法士協会会員統計資料．日本作業療法士協会誌 54：5-22，2016.
- 3) 宇佐美好洋：施設におけるリハビリテーション—作業療法士の立場から—．保健の科学 53（10）：659-662，2011.
- 4) 栗木黛子，佐藤芳子，西浦 功，松原日出子：特別養護老人ホームにおける介護職の業務実態と負担感（調査報告）．人間福祉研究 6：101-119，2003.
- 5) 大塚真理子，平田美和，新井利民，大嶋伸雄，井口佳晴，他：在宅高齢者への援助活動におけるインタープロフェッショナルワークの構成要素．埼玉県立大学紀要6： 9-18，2004.
- 6) 山本道代，奥宮暁子，山本武志，相馬 仁：介護老人保険施設における医療・福祉専門職間の情報提供と被提供の認識の相違．保健医療福祉連携 7（1）：2-10，2014.
- 7) 宇佐美好洋，小川恵子，西田裕介，小林隆司：特別養護老人ホームにおける作業療法士と介護職の「情報の共有化」に関する認識．作業療法 36（2）：170-182，2017.
- 8) 加藤健太郎，山田剛史，川端一光：R による項目反応理論．オーム社，2014.
- 9) 豊田秀樹：項目反応理論（事例編）—新しい心理テストの構成法—．朝倉書店，2002.
- 10) 清水裕士：フリーの統計分析ソフト HAD—機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案—．メディア・情報・コミュニケーション研究 1：59-73，2016.
- 11) 藤森 進：項目反応理論における無答処理とニューラルネットワークによる能力母数の推定．人間科学研究 22：1-12，2000.

- 12) Baker FB : The basics of item response theory. 2nd edition, ERIC Clearinghouse on Assessment and Evaluation. Washington DC, 2001.
- 13) 田中克恵, 加藤真由美 : 特別養護老人ホームの「よりよい終末期ケア」を支えるチームケアの要因—多職種チームの構成員およびチームプロセスの検討—. 日本看護研究学会雑誌 39 (5) : 1-14, 2016.

## **Abstract**

We develop a self-checklist to evaluate how occupational therapists (OT) are involved in factors promoting information sharing with nursing care workers (CW) at special nursing home for the elderly. We conducted a questionnaire on the OTs working for special nursing homes for the elderly in Japan. 19 items of the checklist were analyzed by item reaction theory. We got responses from 223 people, and all the items were appropriate for the scale composition. In addition, it was found that the checklist had low measurement accuracy when executed with OTs with high ability to promote information sharing. Furthermore, it was confirmed that the measurement precision was sufficiently maintained when it was carried out to the OTs with moderate ability (somewhat lower) .

**Key words:** Special nursing home for the elderly, Occupational therapy, Collaboration